五泉南小学校学校だより

南の風

令和５年７月２１日　第４号

・巻頭言
・７月のスナップ
・熱中症対策　・校地内外の事故防止
・８月の予定

子どもたちが未来を変える

校長　若狭　陽一

７月のある日、私に１件の電話が入りました。以下の内容です。

> 南公園で、５年生複数人が、自主的にゴミ拾いをやっていました。しかも、雨の中を・・。ちょうど、地域のボランティアの方もゴミ拾いをしていたので、「手伝いましょうか」と声もかけていたようです。ぜひ、学校でも褒めてやってください。

とても、嬉しい内容だったので、早速、集会や放送で、全校に紹介しました。

これまで、「小学生が公園でゴミを放置している」という苦情をいただいたことも実際にはありました。しかしながら、たばこ等、ゴミの内容から考えて、公園にゴミを放置している方の多くは、もっと上の年齢の方のようにも思えます。もし、大人が汚したゴミを今回の小学生が片付けていたのならば、何か社会の矛盾を感じられずにはいられません。

先日、あるテレビ番組で、過去の鉄道の様子が放映されていました。番組で強調していたのは、「１９５０～６０年代当時の汽車の中は、ゴミが散乱している」「車窓からは、ポイ捨てが行われていた」ということでした。確かに、私が子どもの頃（１９７０年代）でさえ、汽車に乗ると、備え付けの灰皿から煙が出ていたり、座席の下には、ジュースの缶や弁当の空箱、新聞紙などが放置されていたりしたことを思い出します。今では、とても考えらえない光景です。

今や、サッカーワールドカップ等で、自主的にゴミ拾いをする日本人サポーターが世界から賞賛され、その善行を見習う他国のサポーターが現れ始めています。環境への意識という面で、日本社会は変わったのだとつくづく感じます。

私の子どもの頃も当然、学校や家庭で「ゴミを散らかさないように」という指導は行われていました。ただ、指導の中心は「自分の身の周り」「自分が出したゴミ」についてだったような気がします。今は、「自分の身の周り」だけでなく、「地域のゴミ」、「地球規模でのゴミ」も指導の対象となっています。こういった環境教育が小学校で本格的に取り上げられるようになったのは、１９９０年代になってからです。今や環境教育もすっかり定着し、環境教育スタート時の子どもも４０代になりました。ワールドカップのゴミ拾いに象徴される大人たちの姿は、正に国を挙げて環境教育に取り組んできた成果だと言えるのではないでしょうか。

このように考えると、よりよい未来に変えるのは、今の子どもたちだとつくづく思うのです。「子どもは、大人のよくない行為を真似てしまう」という消極的な考えではなく、「子どもは、大人によい行為を真似させる力をもっている」「子どものよい行為が未来を変える」という積極的な考えをもちながら、日々の教育にあたっていきたいと思います。

さあ、夏休みが始まります。子どもは、家庭、地域へと帰ります。子どもが正しいと思って行った行為が家庭や地域を明るくすることでしょう。子どもが家庭や地域に貢献し、それが周りから認められ、賞賛されることで、子どもの自己有用感は高まります。自己有用感の高まりが、さらなる善行につながり、家庭や地域を明るくしていくという好循環が生まれます。子どもに対する私たち大人の役割として大切なのは、「子どもを認め、励ますこと」だと考えています。